

「尊厳死」思想を検討する

—— その基本的な発想の問題点についての小考 ——

黒崎 剛

はじめに

宮川俊行氏はかつて「安楽死」をその性質から以下のように分類した。——①「尊厳死」（狭義の）：精神的、人格的価値を生物学的生命より価値ありとし、非人格の生存を無意味として退ける。②「厭苦死」：苦痛がはなはだしく、しかも鎮痛可能性が少ない場合の生存を拒否する。③「放棄死」：関係者に過度の負担となるような生存を拒否する。④「淘汰死」：共同体の存立と繁栄に有害無益な生存を退ける⁽¹⁾。

この分類は歴史上「安楽死」と呼ばれてきた事態のすべてを網羅するものとしては、いまま適切なものである。しかし現在の安楽死論は③や④のような「安楽死」は、社会福祉、あるいは民主主義の問題と見なしており、すでに「安楽死」として論じることをゆるさなくなっている。そこで残るのは①と②だけである。そして、一般的な分類としては②が相変わらず安楽死の典型である。しかし、宮川氏がその著書を刊行して以降、1980年代、90年代を通じて、「安楽死」という名称は「現在および予期される苦痛を避けるために、もっぱら本人の自己決定に基づいて、医師が行なう致死行為」という意味に制限されてきた。つまり②が、苦痛を避けるという以外にもかなりの理論的な限定を受けた上で、一般的に「安楽死」と呼ばれるようになっていく。そしてこれに対して①は狭義の尊厳死というよりも、尊厳死そのものとして、「積極的な延命治療を拒否あるいは停止し、それによって死の方向を（患者が）自覚的に選択すること」を指すようになってきた。つまり、従来部分的に重なり合っていた「安楽死」と「尊厳死」という名称が、はっきりと分類として区別されるようになったわけである⁽²⁾。

このうち、②については筆者はすでに自分の見解を発表している⁽³⁾。そこで、今回はそこで述べきれなかった「尊厳死」について、その一般的な発想が含む意義と問題点に限って、簡単に考察しておきたい。

1. 「尊厳死」とは何を指すのか

（1）安楽死における人間の尊厳

「自己の尊厳を守りたい」という理由で死を選ぶのは、一般的な自殺を除けば、「安楽死」の場合でも共通である。筆者は以前に「医師の手による安楽死」は苦痛を理由とすることによっては一般的には正当化できないという結論をだした。しかし、それに加えて、極度の苦痛があり、鎮痛治療にも限界があり、当人にも関係者にもその苦痛に耐えることに意義を見いだせず、その苦痛に耐えることが当人の人格・個性、すなわち当人の人間としての「尊厳」すら崩壊させるような限界状況に至った場合には、例外的状況として、条件を付した上で、安楽死の選択を倫理的に正当化できるとした。なぜなら、そのような限界状況においては、死とは一般的な人の問題ではなく、純粋に個人の問題とみなさなければならないと考えられるからである⁽³⁾。一般的な倫理学の議論においても、一個人の生命は絶対的、無条件的に守るべき価値ではなく、「自分の命を犠牲にしても守るべきより高い価値」がある場合（例えば、定員の決まった救命ボートに乗らずに、沈没していく船に残る）に、死を選択することは倫理的に間違った行為ではない。そして、「自己の尊厳を守る」ということが、「守るべきより高い価値」になることがあるということは、不治、末期の患者の場合には十分考えられる。実際、安楽死の場合においても、人々が安楽死を許容する理由と見ているのは、純粋に苦痛ではなく、その苦痛に伴う人格性・尊厳ある生活の崩壊なのであった。

しかし、この場合にはあくまでも苦痛が主であるという事態に変わりはない。なぜなら、鎮痛治療によって苦痛を感じることなく闘病生活を送ることができるのであれば、誰も安楽死を望んだりしないからである。そして、それは鎮痛治療の高度な発達によって可能になりつつある。だから、苦痛を理由とする安楽死にも「自己の尊厳を守る」という理由があるとしても、それは苦痛に付随するものとしてである。だからこの場合は、あくまでも安楽死であって、「尊厳死」ではない。

（2）「尊厳死」の定義

では、厳格な意味での「尊厳死」とはどういう事態を指すのだろうか。

結論を先に述べれば、「尊厳死」とは、「死に臨んだものについて、無意味な生

存を否定して、延命治療を行わず、死の方向を選択すること」をいう。言い換えれば、「尊厳ある生」を「単なる生存」よりも価値あるものとし、自分の「尊厳」が守れなくなった場合、「無意味な」延命処置を拒否するという「消極的な安楽死」の形をとることによって、かえって積極的に死を選ぶことである。いわゆる「生命の尊厳」（生命そのものに無条件の価値があるとする延命主義の立場）に対して、「生命の質」（いかに生きているかが大切だとする内容主義の立場）を優越させる態度である。

ただ、こう定義しても、尊厳死には大きく質の異なる二つの場合がある。すなわち、1）死期が迫っていると確実に判断される患者が、自己の尊厳を守るために自らの意思で死を選ぶ場合と、2）本人の意思は分からないものの、ICU（集中治療室）の設備が整ったところで、或る人が医学的にみて回復の望みが低く、末期的状態に陥っていると思われるのに、生命維持装置につないで「無理矢理」生かしておくという状態を、「人間の尊厳に対する冒涇だ」と捉える場合である。

そして、そのさいに問題になるのが意志決定の主体であるが、これには次の三つの場合が考えられている。

（a）自己決定：最もラディカルな尊厳死思想では、本人が最後の自由意志の発揮として、自分の「尊厳」を守るために、合理的にその人の生命を終わらせることができるとする。ただしこの場合も、基本としてはあくまで「回復の見込みがない」という状態にある人に限られ、一般的な「自殺」ではない。この場合は死に至るまで当の本人が自覚的に自分の生の演出を行い、死の時期までを決定する。

（b）他者による決定：当人の意志が分からない場合でも、無意味な延命だと、関係者が判断せざるを得ないような状況におかれた人の生命を終わらせることも広い意味で「尊厳死」と呼ぶこともできる。これは八十年代以前には「安楽死」と呼ばれていたものであるが、いまでは「尊厳死」という概念でくられるようになってきている。

（c）事前の自己決定：尊厳死を選択するにあたっては（a）が理想なわけだが、これを大原則とすれば、（b）の状況では尊厳死の選択が正当化されないことになる。この困難を解決する手段として、或る人が自己決定能力・理性のあるうちに、末期的状態になったときに延命処置をしないで死なせてくれるよう医師

に依頼しておくというやり方が取られる。この場合、尊厳死を希望する人が、いわゆる「リビング・ウィル」（living will生者の意志）を用意しておく方法がとられている。リビング・ウィルはすでにアメリカ合衆国の一部の州などでは法制化されているが、法制化されていない場合に、医師がどれくらいそれに従わなければいけないのか、その拘束力はなおはっきりしないという問題は残っている。

（３）人間の「尊厳」をどこに求めるか —— 尊厳死思想の共通の発想

では、「尊厳死」を人の死のあり方として求める場合に、いったい何が人間の「尊厳」であると考えられているのだろうか。

人間の「尊厳」について語ろうと思えば、そこには各人の思想・心情にもとづいた多様な主張がなされることであろう。例えば、L. R. カースは「尊厳に満ちた死とは速やかに逝く死ではなくて、迫り来る死を知ること、自己の行為の保持、家族的・社会的・職業的關係と活動の維持…自分の終わりという残酷な事実と意味から目を逸らさないことを必要とする」と言い、現在の尊厳死容認に傾きがちな態度に警鐘を鳴らしている⁽⁴⁾。

しかし、いま我々が知ろうとしているのは、「尊厳死思想」の持ち主たちが共通に抱いている発想であって、尊厳死についての「すぐれた見解」ではない。そしてその共通の発想を表現するならば、尊厳死思想において自覚的・無自覚的にかかわらず想定されている「人間の尊厳」の根拠とは、「自らの理性と自由意志に従って自分の人生を営んでいく生存のあり方」、一言で言えば「人格的生命」である、と言ってよいと思われる。この意味での「人格性」とは、例えばカントが述べているような「手段にならない、目的としての人間存在」というような展開された倫理的な意味で使われているのではなく、端的に人間の一般的な意味での（感覚や知覚などのいっさいを含めた）「自己意識的活動」のことが考えられている。自己意識的活動ができるということ、もっと具体的に言えば、「一般に人間として期待される理性を持ち、自己の意志に従って自覚的に生きることができる」ことこそ、人間の尊厳を保証するものであり、そこに人間にふさわしい生があると見なされているのである。

これを理論的に反省させてみれば、次のように言うことができるだろう。——そのような自己意識的＝人格的存在であってはじめて、「倫理性」と人間の「尊厳」とを考慮することができる。自然にしたがって生まれては死ぬだけの単なる

動物的生命には「尊厳」と呼べるものはない。人格的生命が存在しなければ、動物的生命も含めた「生命一般の尊重」という発想すらないはずである。だから人間からそのような人格性が消え去ったときには、彼は生存しているとはいえ、人間として尊重される資格を失ってしまっており、人もまた生死の流れに従って死んでいくさだめを甘受すべきである。――

尊厳死思想の根底にある共通の発想は、以上のようにまとめることができる。

2. 尊厳死思想を検討する

(1) 尊厳死思想の提起したもの

「人間の尊厳」ということが以上のように考えられているとすると、尊厳死を求める思想が提起しているものを、次のように整理することができる。

1) それはまず、「人間に対して人間にふさわしい死を与えよ」ということである⁽⁵⁾。――人間というものはしよせん宇宙の中の一存在にすぎないにもかかわらず、その生命が地球上の他の生命体に比べて特別扱われる資格を持つのは、万物を認識し、目的意識を持ち、その目的意識にしたがって世界の環境を作りかえ、自然の目的を自覚的に追求することができる理性を持った存在だからである。

2) したがって、人間がこの意識能力を失ったときには、その人間の単なる身体的生命は例えば他の動物の生命に比しても特別の価値を持つものとは見なすわけにはいかないとということになる。――我々はともすると人命を「絶対的価値を持つもの」と考えがちだが、人間といえども、最終的には死にいたる存在であって、死そのものは倫理的悪ではない。尊厳死の現場となる医療の世界においても、その目標は「不老不死」の実現にあるのではなく、「自然死」の実現にあるはずである。

尊厳死思想は人の死をあるべきものととらえ、「無意味な延命治療」を拒否する。それによって、単なる生物学的生命に対するこの「人格性」という価値を改めて確認し、人間にふさわしい生は、人格的生であるということを提起しているのである。

(2) 尊厳死思想の問題点

尊厳死思想は「私にとつての尊厳」という個人性を越えて、非人格的生命一般

を消し去ることを正当とする。人間の生とはあくまで人格的生であって、非人格的な生存の仕方を「無意味」とし、人間の尊厳に反するものと見なす。そして人間一般の尊厳を守るために死を選択する正当性を主張する。

しかし、ここには注意しなければならないことが二つある。

1) 実際に誰かが尊厳死を選ぶという場面においては、問題になるのは「この私」の尊厳であって、人間一般のそれではないのだが、尊厳死思想ではそれが取り違えられて、ある種の状態になった人たちが尊厳死を選ぶように心理的に脅迫されるようなことになる危険がないとは言いきれないということである。

2) さらに人間の尊厳を自己意識的存在＝人格的存在の尊厳と等しくする場合、「人格」の概念規定によって死が許される対象と範囲が変わってきてしまうということがある。人格概念を「理性と意志を持って、自覚した行動がとれるもの」ととり、この能力を失ったものは尊厳を失った人間だとすると、逆にこの能力を欠いたものは必ずしも延命の対象にしなくてもよいということになる。だが、実際にはそうした能力の有無しを境界線にすると、不当に治療放棄される人がでてきてしまいかねない。脳死判定の場合でさえ、その判定方法をめぐっては激しい対立があり、脳死とするからには脳の「機能死」（脳機能の不可逆的停止）では不十分で、「器質死」（脳細胞の溶解を待つこと）さえ主張されたように、機能や能力のあるなしを判定するのは、現在の医学でさえ完璧にはできないし、瀕死の状態から回復のための医療技術も年々向上している以上、「能力の有無」を死の正当化の基準とするのは危険が大きい。批判の対象となっているものは「無意味な延命治療」であって、「延命治療一般」でないのだが、尊厳死思想ではこの二つの区別があいまいになる傾向がある点については、我々は常に特別な注意を払うべきである。

小括

以上述べたことを整理しておく、安楽死や尊厳死を一つの「思想」として捉えた場合、問題になることは次の点である。すなわち、尊厳死を選択せざるを得ないような極限状態での死というものが、あくまでもある特定の個人が選択する死であるのに、思想としては常に死を選ぶ理由を一般化しなければならず、その結果としてはじめに考えられていたこととは違う結果を生み出しがちなことであ

る。過去のナチスの例を持ち出すまでもなく、善意からの行為であっても、安楽死や尊厳死の思想にはある種の人々を救命しないための雰囲気をつくりだす危険というものが常につきまとっていることを忘れるべきではない。

私が私の尊厳を守るために延命治療を拒否するというのは、その人の生きてきた「歴史」＝個人史を背景にしてはじめて納得される選択であるはずである。「私がいま死を選択することは、生き続けるよりも意味あることなのだ」ということが周囲の人間を納得させることができるほどの重みがあるのでなければ、尊厳死の決断に救命を使命とする医師たちを従わせることなどできないだろう。死の場面でこそ、「私にとっていかに生きるのが、私の尊厳を全うしたことになるのか」という問いかけが必要なのである。

註

- (1) 宮川俊行『安楽死の論理と倫理』東京大学出版会、1979年、11-16頁。
- (2) 「尊厳死」に関して学会の現在における理解と対応は、日本学術会議「死と医療特別委員会」報告、「尊厳死について」（掲載：『ジュリスト』No1061、1995.2.15）によくまとめられている。
- (3) 拙稿「〈死ぬ権利〉をどう考えたらよいか——自殺権の虚構性と安楽死の根拠——」。収録：『倫理学年報』第47集（日本倫理学会編）1998年3月、187－201頁。
- (4) L.R.Kass, Death with Dignity and the Sanctity of Life, *Commentary*, March 1990, p.33-43
- (5) 英語では「尊厳死」は Death with Dignity であるが、ドイツ語ではこれに当たる言葉として文字どおり「人間に値する死」*menschenwürdig Sterben* ないし *menschenwürdig Tod* という言い方がある。